

最高学部

2021年度自由学園最高学部4年課程卒業研究

・2年課程卒業勉強について

奈良 忠寿

2021年度最高学部4年課程卒業研究は23人が22のテーマに取り組んだ(個人研究21・共同研究1)。2年課程卒業勉強は5人がひとつのテーマに取り組んだ。成果はそれぞれ論文にまとめられ、2022年2月19日(土)にオンラインで開催された報告会で発表された。

I. 最高学部の卒業研究と卒業勉強とは

自由学園最高学部生は4年課程(四年制)・2年課程(二年制)とも、自由学園での学びの“まとめ”として、最終学年の1年間を通して研究活動を行う。研究成果は、論文として纏められるだけでなく、卒業直前に開催する報告会で口頭発表され、論文は自由学園図書館で保管されている。

4年課程の卒業研究は、3年次から2年間所属する「領域横断研究」「経営実践研究」のゼミナールで進められる。最高学部で展開するリベラルアーツを土台とし、学生の問題意識や興味・関心に端を発することが多く、設定した研究課題の解決に必要な専門分野を修得し、特定の専門の枠を超えた研究活動を行うことが特色である。「経営実践研究」では加えて、学園の教育理念に呼応する次世代経営者、起業家あるいは社会貢献団体経営者たる資質を養う。

II. 2021年度の研究内容

2021年度の4年課程卒業研究と2年課程卒業勉強に関し、報告会の予稿集(最高学部2022)をもとに研究タイトル一覧と一部の研究の概要を紹介する。また、最高学部が発刊しているジャーナル誌『生活大学研究』8巻1号にも2021年度卒業勉強・卒業研究報告会の概要が掲載されているので(遠藤2022)合わせてご覧いただきたい。

フィールドサイエンス

5本の論文が執筆された。南沢キャンパス内や周辺でのフィールドワークによる研究と、そこから派生したテーマの研究がある。論文1は、向山緑地の環境調査とナラ枯れ対策に関する研究である。向山緑地での活動は、学園が団体会員として参加している市民ボランティア活動 向山緑

地・立野川勉強会と共に行われ、さらに東久留米市が森林環境譲与税充当事業として行っている「向山緑地若返り事業」と緊密に連携し進められた。ゼミ名に対しやや異質に思える研究があるが(論文3)、ゼミ主任の専門分野であり、このゼミに所属して研究を進めつつ、ヒューマンサイエンスゼミ所属教員の指導も受けるという、領域横断型の研究となった。論文4の研究成果の一部は2021年地下水学会秋季講演会にて発表された。

ヒューマンサイエンス

7本の論文が執筆された。どの論文も著者自身が見聞きしたことや経験に端を発する問題意識であり、現代的な課題も反映されている。それを社会や人間との関りへと抽象化して論考が行われているが、その論考は社会的課題への回答、自身への回答となり、人間的な成長と今後の人生への指針ともなる。ある意味、筆者の学園生活の集大成ともいえる最高学部らしい研究となった。

データサイエンス

4本の論文が執筆された。コロナ禍で経験した学びの困難さを解決しようとする研究、自身で収集したデータの統計解析を行う研究など、多彩なテーマで研究が行われた。ゼミには、美術系・人文系の指導者も所属しているが、論文16は画像の色彩に関する研究でもあり、領域横断的な指導体制で進められ、研究成果の一部は第91回形の科学シンポジウムにて発表された。

ライフスタイル

2本が執筆された。論文18では、最高学部生と他大学生

の比較調査が行われ、社会に対し主体的に働きかける意識が強い最高学部生の特性が改めて明らかになった。

マネジメント

共同研究1本を含む、4本が執筆された。ゼミナールで必修とされる学外研修の成果を研究として深めたものが多い。論文19・論文22は、卒業後の働き方につながる研究となった。

2年課程

創立100年の節目でもあり、学園教育の一つである「生活体操」の歩みと今後を考えた。学園では健康的な生活のできるようになるという意識のもと、「競技」ではない身体教育を行っているが、得た学びが「楽しい体操」という言葉に込められている。

III. 2021年度の報告会

2021年度も新型コロナウイルス感染症拡大を防ぐため、研究成果報告会はZoomを用いたオンライン発表で実施した。前年度の経験を活かし、運営や機材の点では大きなトラブルもなかった。

おわりに

2021年度もコロナ禍のため入学後・後期課程進学後の学習や、ゼミナール活動に制限が加わった学生たちであったが、研究を成し遂げることができたのはひとえに学生の努力による。

2021年度の卒業研究・卒業論文を概観してきたが、今年度も身近な経験に基づく視点から、社会的課題に切り込む論考が多く認められ、自由学園ひいては自由学園最高学部の教育がめざしているものが結実した印象を受ける。そして、研究活動に最高学部研究奨励金を活用したものが多く点も挙げられる。

謝辞

学生の研究指導にお力添え下さったすべての皆様、報告会にご来場くださった皆様に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

参考文献

- 遠藤敏喜「2021年度最高学部4年課程卒業研究ならびに2年課程卒業勉強について」『生活大学研究』8巻1号 2022年 112-117.
- 自由学園最高学部「2021年度 自由学園最高学部 卒業研究・卒業勉強 報告会 予稿集」2022年

II-1 2021年度 論文題目一覧

領域横断研究：フィールドサイエンス	
1	武蔵野の水源の森の若返り — 向山緑地の変化とナラ枯れ —
2	木のおもちゃに関する研究 — おもちゃの捉え方を考え直し、木のおもちゃを製作する —
3	自由学園における消費組合に関する研究
4	自由学園における実習園場「新天地」の施設設備の改善に関する研究
5	校内でのGISを用いた樹木データの活用に関する研究
領域横断研究：ヒューマンサイエンス	
6	歴史の変遷から見るラジオ放送の役割
7	英国パブリックスクールと自由学園のスポーツ教育 ～ラグビーフットボールを中心として～
8	小学生における自己肯定感に関する研究
9	現代教育における労作の意義 — 自由学園における実践を中心に —
10	乳幼児教育制度と育児を取り巻く環境の考察 — 日本とデンマークの「森のようちえん」を事例として —
11	山に登る人々の山に対する意識の変化
12	美容院は社交場になりうるのか — 対話が自然と生まれる要素とは何か —
領域横断研究：データサイエンス	
13	リアルタイムのオンライン講義における字幕の利用
14	バスケットボール競技におけるオフェンスチームプレーの類型化
15	3Dモデルアバターの開発とウェブシステムへの展開
16	学校教育の特徴を反映したルックの形成とその実践的利用の提案
領域横断研究：ライフスタイル	
17	自由学園最高学部の校外学習を伴う実習についての考察 — 「日本の食・勇気米作りと頒布」のこれまでとこれから —
18	現代の若者のライフスタイル研究 — 自由学園最高学部と他大学の学生の比較 —
経営実践研究：マネジメント	
19	大型老舗温泉旅館における個人客集客への取り組み — 石川県和倉温泉「ホテル海望」のコト消費による顧客との関係構築 —
20	マーケティング視点による寧楽共働学舎の製品の販売向上に関する検討(共著)
21	eスポーツの市場創造に関する研究
22	多様な人が出会う通いの場づくりに関する研究 — 地域共生社会の実現に向けた通所施設の可能性 —
2年課程卒業勉強	
1	自由学園創立100周年の歴史から考える新しい体操の提案(共著)

最高学部

2022年度 自由学園最高学部4年課程卒業研究・

2年課程卒業勉強について

奈良 忠寿

2022年度最高学部4年課程卒業研究は17人が15のテーマに取り組んだ(個人研究14・共同研究1)。2年課程卒業勉強は3人がひとつのテーマに取り組んだ。成果はそれぞれ論文にまとめられ、2023年2月18日(土)に自由学園創立60周年記念講堂で開催された報告会で発表された。

I. 最高学部の卒業研究と卒業勉強とは

自由学園最高学部生は4年課程(四年制)・2年課程(二年制)とも、自由学園での学びの“まとめ”として、最終学年の1年間を通して研究活動を行う。研究成果は、論文として纏められるだけでなく、卒業直前に開催する報告会で口頭発表され、論文は自由学園図書館で保管されている。

4年課程の卒業研究は、3年次から2年間所属する「領域横断研究」「経営実践研究」のゼミナールで進められる。領域横断研究は、最高学部で展開するリベラルアーツを土台とする研究である。学生の問題意識や興味・関心に端を発することが多く、設定した研究課題の解決のために必要な専門分野を修得し、特定の専門の枠を超えた研究活動を行うことで創造的に探究する力を養う。

経営実践研究は「マネジメント」ゼミナールから成る。自由学園の教育理念に呼応する経営者像を掲げ、人を大事にし、社会への新たな構想を持ちつつ、事業革新に挑戦する次世代経営者、起業家あるいは社会貢献団体経営者たる資質を養う。マネジメントに所属する学生は3年次に学外研修(おもに企業インターンシップ)を行うことが義務付けられている。

II. 2022年度の研究内容

2022年度の4年課程卒業研究と2年課程卒業勉強はどのようなものであったか。報告会の予稿集(最高学部2023)をもとに研究タイトル一覧と一部の研究の概要を紹介する。また、最高学部が発刊しているジャーナル誌『生活大学研究』9巻1号に2022年度卒業勉強・卒業研究報告会の概要が掲載される予定であり(奈良2024)合わせてご覧いただきたい。

フィールドサイエンス

1本の論文が執筆された。南沢キャンパス内や周辺の水循環に関する研究は近年のゼミのテーマである。過去の研究成果と、著者がギャップイヤー取得中も調査研究をつづけた成果が大作としてまとまった。成果の一部は、令和3年度ならびに令和4年度土木学会全国大会で発表されたほか、日本地下水学会2022年度春期ならびに秋期講演会で発表された。

ヒューマンサイエンス

5本の論文が執筆された。論文6は、文献に基づき民藝思想の現代的意義を再考しているが、それとは別に著者は最高学部の美術を履修し、作品を制作した。作品と研究が相互に影響を及ぼしあっていることがうかがえ、最高学部らしい研究となった。

データサイエンス

5本の論文が執筆された。論文7は自由学園で続けてきた音楽活動とデータ解析を結びつけた。論文11も自身が続けてきた部活が研究の契機となっている。演奏者・競技者がデータ収集・解析を行うことで、演奏者・競技者の視点が生きた研究となった。

ライフスタイル

2本が執筆された。『自由学園防災マニュアル』はかつての最高学部の卒業研究成果がその元となっているが、論文12は地震を中心にその見直しと改訂を行った。

マネジメント

3名による共同研究1本と個人研究1本が執筆された。ゼミナールで必修とされる学外研修の成果を研究として深めたが、コロナ禍の影響でリモート調査となり苦労したようである。共同研究では、3人の異なった視点や対象の事例研究を、大きく「地方創生へむけた地域ブランディング」という観点から共通点をさぐり、総括した。

2年課程

個別テーマで勉強をすすめ、総合考察を行った。美術・音楽・体操による身体表現など、芸術に多く親しむ自由学園の教育プログラムを評価している。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、展覧会・演奏会などが中止されたが、著者たちにとって、自身が成長過程で大きな影響をうけたものが「不要不急」とされたことは、大きな影を落としていることを感じさせた。

III. 2022年度の報告会

2022年度はZoomを用いたオンライン発表を併用しつつ、保護者など限られた聴衆を会場に招いて行った。感染症拡大防止と遠隔地に住む聴衆の利便性を考慮した、あらたな卒業勉強・卒業研究報告会として、大きなトラブルもなく会を終えることができた。

中高の「探求」の授業と連携し、生徒が探求の時間内に参加した。さらに今回初めて、聴衆との意見交換を活発にする目的で、質疑応答の時間を、ゼミごとに分かれたブースで行った。また、生徒には発表形式ではなく対話形式の方が研究内容を伝えられるという考えもあった。その狙い通り、来場者と発表者が各ブースで研究について活発に話す様子が出た。

おわりに

2022年度の卒業研究・卒業論文を概観してきたが、今年度も身

近な経験に基づく視点から、社会的課題に切り込む論考が多く認められ、自由学園ひいては自由学園最高学部 4 年課程卒業研究ならびに 2 年課程卒業勉強について『生活大学研究』9 巻 1 号(投稿中) 2024 年

謝辞

学生の研究指導にお力添え下さったすべての皆様に、この場を借りて深く感謝申し上げる。あわせて、報告会にご来場のすべての皆さまにあらためて感謝申し上げます。

参考文献

自由学園最高学部『2022 年度 自由学園最高学部 卒業研究・卒業勉強 報告会 予稿集』2023 年

II-1 2022年度 論文題目一覧

領域横断研究: フィールドサイエンス	
1	地域を取り巻く水循環の健全化に資する調査・観測手法の実践的開発 — 自由学園校内及び落合川流域をモデルとして —
領域横断研究: ヒューマンサイエンス	
2	戦後ドイツの和解政策
3	映画の知覚—「もの」を知覚する方法—
4	ネオレアリズモとは何か—映画史・映画哲学・社会情勢の視点からの考察—
5	嗜好品のもつ効用と影響
6	柳宗悦・宗理の直観と手工藝思想に関する研究—現代における民藝の意義再考—
領域横断研究: データサイエンス	
7	音楽のチョコレート味覚体験への多感覚的影響に関する研究
8	舞台演劇における演技力について—演技初心者演技力向上に向けて—
9	歴史資料のデジタル化と活用—自由学園南遺跡出土縄文土器を事例として—
10	二次燃焼構造による最適な焚き火台の燃焼の探求
11	サッカー競技におけるコーナーキックの解析
領域横断研究: ライフスタイル	
12	私たちの防災は万全か—自由学園における持続可能な防災システムの構築—
13	コーヒーをめぐるライフスタイル—日本とデンマークを比較して—
経営実践研究: マネジメント	
14	なぜテーマパークに行きたくなくなるのか —東京ディズニーリゾートの顧客満足に関する研究—
15	地方創生に向けた地域ブランディングに関する研究(共著)
2年課程卒業勉強	
16	私たちにとって芸術は必要不可欠なものとなりうるか —現代における芸術の在り方とは—(共著)